

鶴岡首席交渉官によるぶら下がり記者会見の概要

日時：平成27年3月6日（金） 19：20～19：25

場所：成田空港内

【質疑応答】

（記者）

今回の会合の意気込み如何。

（鶴岡首席）

今回は、米国の連邦議会で貿易権限法案の審議が今のところ調整中という状況で、大きな進展がまだ実現していない中での首席交渉官会合になる。閣僚会合を設定した上で、TPPの残された重要課題の政治的な決着を目指して、これまで準備を進めてきているし、今回もその目標に向けた会合にしていきたいと思っているが、連邦議会の貿易権限法案の動きはやはり交渉全体に影響を及ぼさざるを得ない、そういう関係になるのではないかと考えているので、日本側としては、なるべく進展を実現するために最大限の努力を払い、日本の国益を最大限実現したいと思っているが、各国がどのくらいの準備をし、意欲をもって会合に臨んでくるのか、その点については現地に行ってからでないと見極めがつかないという、やや期待と不安とが入り混じった状況であるというのが正直な心境である。

（記者）

今日までに日米二国間の協議も行われたが、なお難しい問題も残されているということだった。そのあたり、12か国の交渉への影響をいかがお考えか。

（鶴岡首席）

日米の交渉がまとまるということは、TPPを進める上で、あるいは最終的なTPPの合意をつくる上で、必要不可欠な条件と思っているが、全体の流れの中でやはり、日米も交渉の進展を見極めていくので、先程申し上げた全体の雰囲気の中で、残されている問題が困難であるだけに大きな進展をみるに至っていないという状況にあるものと思う。日米の作業はこれからも続いていくし、日本側と米国側の双方がTPP交渉を早くまとめたいという意欲には何ら疑問もなければ意見の違いもない。ただ、現在、米国連邦議会との関係で交渉を進めることがどこまで可能かという点については、やはり今の状況の下で一定の立場というものを考慮せざるを得ないのではないかと考える。この点は米国の国内政治の問題なので、我々日本側としては、誠意をもって交渉を続け、交渉結果についてはこれを最終のものとする、という考え方でこれまでも臨んできているので、我々日本側からみたとときの交渉の障害はないとみている。ただ、全体の交渉の流れの中でやはり、二国間の交渉というものも位置づけられるので、そういった雰囲気が影響を及ぼすという点については否定できない状況ではないかと思う。

（以上）